

日本女性科学者の会 SJWSロールモデル集



作成：(社)日本女性科学者の会 SJWS事務局
〒453-8777 名古屋市中村区平池町4丁目60-6
愛知大学 名古屋一般教育研究室内
E-mail:sjws-office@sjws.info
tel : 052-564-6151 fax : 052-564-6251



研究環境の変化にめげることなく 新分野に挑戦する！

功刀 由紀子
愛知大地域政策学部教授

＜仕事の内容とやりがい＞

当初酵素化学分野の実験研究を行っていましたが、勤務校を変えたことにより、実験が殆ど不可能になりました。研究環境が激変する大学への移動については随分悩みましたが、最後は実験以外の新分野で自らの意欲や能力を試すことに決めました。現在は、食品安全に関するリスクガバナンスを研究対象としています。リスクガバナンスとは、文理融合の学際的研究が必要とされる分野です。日本ではまだ馴染みが薄い研究分野ですが、欧米、特にEU諸国では、実験科学者が主体となって展開中です。

＜進路決定のきっかけ＞

小学生の時から本を読むことは大好きでしたが、なぜか国語とは相性が悪く、算数が好きでした。1+1=2というすっきりとした考え方に魅力を感じていました。その延長として、高校では科学部というクラブに所属していました。静岡県には、県出身者でビタミンB1を発見した鈴木梅太郎博士を顕彰する、高校生対象の鈴木梅太郎賞があります。高校でのクラブ活動の成果により鈴木梅太郎賞を受賞したことが、大学と学部選びのきっかけとなりました。

大学院博士課程終了直後に結婚しました。その後、ODおよびドイツ留学を経て専任職に就きましたが、その間6年間を除いて、夫か私のどちらかが単身赴任をしています。現在まで、毎月1回程度の週末は、我が家の本拠地である京都に集合しています。そのため、WLBの視点からはとんでもない家庭環境ですが、子供も含め家族は結構現在の環境を楽しんでいます。家族が揃った時の夕食は全員で作る、夏休みには必ず家族旅行をするなど、家族一人ひとりが常に家庭を大切にす相互理解が重要なことと考えています。

大学で4年間勉強し、実際の研究現場を目の当たりにして知識や見分が広がると、大学進学時に抱いていた興味が変わることは往々にして起こります。現在では、他大学との単位互換も可能ですし、他大学の大学院へ進学することも盛んです。少しの努力で進路変更はいつでも可能、と言っても過言ではありません。さらに、自分は文系か理系か、との区別や思い込みも不要です。現在の学問分野は、いわゆる文系と理系が協働して研究に取り組む学際領域が主流です。苦手分野にも注意を向けると、新しい発見があるかもしれません。

＜仕事と家庭のバランス＞

＜進路選択に対してのメッセージ＞

＜プロフィール＞



静岡県立浜松北高校から京都大学農学部食品工学科進学。京都大学大学院農学研究科博士課程修了(農学博士)後、マックス・プランク実験医学研究所(ゲッチンゲン、ドイツ)研究員を経て、京都薬科大学薬学部助手。この間に第一子出産。1995年に愛知大学教養部助教授。翌年教授昇格し、2008年から現職。

命と健康を守るものづくり「創薬」に挑戦しよう！

永澤 秀子

岐阜薬科大学創薬化学大講座薬化学研究室 教授

<仕事の内容とやりがい>

高齢化社会に適した、人に優しいがん治療薬の開発を目指して「創薬化学」研究を行っています。がん細胞を狙い撃ちするくすりが多く開発されてきましたが、最近、がん細胞が生存する環境にも、正常な細胞の生存環境とは異なる様々な特徴があることがわかってきました。この特徴を標的とすれば、正常細胞には無毒で副作用も少なくくすりできると期待されます。有機化学合成のものづくり技術を活かして、「がんと共によく生きる」ための新しい概念のがん治療薬を創製することを目指しています。

<進路決定のきっかけ>

小学校では区が主催する土曜理科教室に参加し、中学では担任が理科の先生であったことから、放課後の理科室で好きに実験させて貰ったり、夏休みの研究発表をしたりと、理科好きが昂じて本職になりました。自然科学の中でも特に化学に興味を持ったのは、キュリー夫人の伝記の影響だったと思います。新しい分子を発見したり、合成したりするものづくりの奥深さに魅了されてこの世界に進みました。研究は、一人では成しえず、学生や仲間との共同作業である点も大きな魅力です。

大学の同級生と結婚。助手時代に二人の娘を出産し、母と夫の協力のもと研究を続けました。次女が2歳の時に徳島大学にポストを得て娘二人と赴任しました。そこでも、上司の教授夫妻、保育園や塾の先生方や家政婦さんなど、多くのよき出会いに恵まれ、7年間を無事に過ごし、長女の中学受験を期に娘達は東京の夫の元へ。その後遅ればせながら留学し、帰国後晴れて自分のラボを持つことができましたが、相変わらずの単身赴任です。現在就活中の二人の娘達は、苦楽を共にした同志の様な存在です。

薬学部は薬剤師になるための学部と知っている人が多いかもしれませんが、くすりづくりの研究者を養成する学部であることを知って貰いたい。新薬開発の成功確率は三万分の一とも言われ、くすりづくりは生物、化学、物理などすべての科学を駆使した壮大な挑戦ですが、日本は世界第3位の創薬力を誇っています。誰よりも先に未知なる世界を覗けることは科学者ならではの特権で、この喜びが困難な挑戦にも粘り強く立ち向かう力を与えてくれます。ぜひ「創薬」に挑戦してほしいと思います。

<仕事と家庭のバランス>

<進路選択に対してのメッセージ>

<プロフィール>



東京学芸大附属高校 → 岐阜薬科大学 → 京都大大学院薬学研究科修士・博士後期課程修了(薬学博士) → 慶應義塾大学医学部薬化学研究所 助手<結婚、二女を出産> → 徳島大学工学部生物工学科 講師、助教授 → 米国ジョンホプキンス大学 客員助教授 → 現職

仕事が人生を作ってくれる！

浜田 恵美子

日本ガイシ株式会社取締役、JSTプログラムオフィサー、名古屋大学客員教授

＜仕事の内容とやりがい＞

太陽誘電(株)にて、世界初、CD-R(記録できるCD)を発明し、事業化、標準化に携わり、DVDやBDに続く光ディスクの時代の中で働きました。23年の勤務のあと、コンサルタントを経て、名古屋工業大学産学官連携センターにて准教授、教授と7年半にわたり、教員生活を送りました。退職後、科学技術振興機構などで国の科学技術政策に関わる審査や評価の仕事に携わり、今年から企業の経営にも関わることになりました。ひとつひとつの経験が次の仕事に繋がり、充実感になっています。

＜進路決定のきっかけ＞

父が企業の技術者で、もともと理系の科目が好きだった私は企業の研究職に就職したいと思っていました。まだ女子に企業の門戸がほとんど開いていない時代でしたが、自力で探し受け入れてくれる会社に出会うことができました。自分の仕事が製品になり、どんどん発展していくことは楽しく、組織の長になることも、とてもやりがいのあることでした。今の自分を想像してはいませんでした。新しいチャンスに出会っては、それに従いここまでやってきたように思います。

子どもは欲しいと思っていましたができなかったもので、結婚30年余り、夫婦共働きでやってきました。同級生の夫なので、仕事を理解してくれるだけでなく、転職には背中を押してもらいました。長く仕事中心の人生を送ってきたように思います。しかし企業での仕事がピークを過ぎてからは、仕事の選び方もハードワークではなく、やりたいこと、やるべきことを中心にすることができ、今は、生活の充実にも時間を割いています。

職業生活はやってみなければわからないことだらけです。喜びも苦労もあります。どうせなら好きな方を選び、迷うならチャレンジの方を選び、前向きであることだと思います。もともと引っ込み思案な性格でしたが、いつのまにか楽天的で行動的な性格に変わってきたように思います。全力でできる仕事を得たことが今の自分を形作ってくれたのだと、仕事に感謝しています。成長したから仕事ができるのではなく、仕事で自分を育てるのだと思います。

＜仕事と家庭のバランス＞

＜進路選択に対してのメッセージ＞

＜プロフィール＞



東京学芸大学附属高校 → 京都大学理学部 → 京都大学大学院理学研究科化学専攻修士課程 → 太陽誘電株式会社総合研究所＜大学の同級生と結婚＞ → 同社技術部長＜東京大学にて学位取得＞ → 在籍のままMBA → 卒業後、退職。コンサルタント兼MBA講師 → 名古屋工業大学産学官連携センター准教授 → 同教授、兼JSTプログラムオフィサー → 大学退職、その他兼業は継続 → 各種兼業(国の評価委員など)と同時に日本ガイシ(株)取締役就任

ポジティブ思考で道を切り開く！

近藤科江

東京工業大学生命理工学院生命理工学系ライフエンジニアリングコース・教授

＜仕事の内容とやりがい＞

大学院でがんの研究を始めました。それから今日まで、癌研究一筋です。どうして癌になるのか？どうすれば癌を早く見つけることができるのか？どんな薬を開発すれば癌が治せるのか？研究を続けながら、大学で研究者の卵を育てる日々を送っています。学生が毎日頑張っている姿や、卒業生が、製薬会社や製薬関連会社で、薬の開発に携わってくれていること、医療とは関係なくても、より豊かな生活作りに貢献する仕事について活躍する姿をみることで、大きなやりがいを感じています。

＜進路決定のきっかけ＞

大学在学中に、一年近い入院を経験し、多くのリウマチ患者を目の当たりにして、免疫に興味を持ちました。大学3年の時に、自分の研究を熱く語る免疫薬理学の先生の講義を聞いて、「研究って面白い！」と思い、講義終了後、講義室を出たその足で、その先生の研究室に行って、「実験をやらせてほしい」とお願いしました。それ以来、研究は私の生活そのものです。自分で決断して、研究者の道を選びました。迷いは全くありませんでした。決して容易な道ではありませんでしたが、自分のやりたいことがそこにあったので、悔いは全くありません。

夫も研究者で、中々育児への協力が得られない中、保育園を頼りに2人の子供を育て、研究を続けました。阪大時代は、学内保育園の運営に奔走し、今でも当時の保護者とOB会を作って、現役の保護者と交流をしています。時には夫の両親の助けを借りたり、実家から母親に来てもらったり、あらゆる手段を使って、何とか仕事と家庭のバランスを保つ努力をしました。子供が病気の時が一番辛かったし、無職になって、研究者を辞めざる得ないと思ったこともありましたが、大変な時期は、そう長くは無いので、途中で辞めずに続けることが大事です。

「自分は何をやりたいのか？」「どんな所に一番能力を発揮できるのか？」自分自身の能力や興味を知る事は、容易な事ではありません。また、偏差値や企業規模への過剰な偏重が、個人の興味や嗜好に基づく進路選択をゆがめてしまうこともあると思います。でも、好きな事や興味のある事は、自然に続けられると思うので、違和感なく続けられるかを、一つの目安にして、ライフワークにするかどうかを決めて行けばよいと思います。それまでは、特に学生の時は失敗しながら、色々な事にチャレンジして、自分の能力・興味を探せば良いと思います。

＜仕事と家庭のバランス＞

＜進路選択に対してのメッセージ＞

＜プロフィール＞



岐阜薬科大学 → Albany Medical College (NY) Microbiology & Immunology (修士修得) → 大阪大学医学研究科腫瘍ウイルス学 (医学博士修得) → 大阪大学微生物病研究所・研究員 <第一子出産> → 日本学術振興会・特別研究員 <第二子出産> → 新技術事業団岡山細胞変換プロジェクト・研究員 → 京都大学医学研究科・研修員 → 助手 → COE助教授 → 特定教授 → 東京工業大学生命理工学研究科・教授 → 現職

「好き」があなたの道を拓く

安川 雪子

千葉工業大学 工学部電気電子工学科 准教授

＜仕事の内容とやりがい＞

研究はとてもクリエイティブで自由な仕事です。自分のアイデアに基づいて実験してサンプルを作ってみます。自分のアイデアが詰まったサンプルができる喜びは格別です。そのサンプルを測定し、目標とした性質が得られれば最高ですし、得られなくても何が原因か考え、再度アイデアを練り直して何度でも好きなだけサンプル作りに挑戦できます。アイデアは誰にも縛られませんし、実験方法も日々の時間の使い方も自由です。こんなにクリエイティブで自由な仕事は、なかなかないでしょう。

＜進路決定のきっかけ＞

高校のときの化学の先生との出会いがきっかけです。大変厳しい先生で、授業は毎回実験でした。そして実験後にはレポートを作成し、次の授業までに提出します。サイエンスの作法を体に叩き込まれたような感じです。自分の好きなことや興味を大切に道を選択してきたら、いつの間にか研究者になっていました。

仕事も家庭も理想的に両立できるなどとは、最初から思っていませんでした。20代早々に結婚し、大学院生のときには子供がいました。毎日午前2時起きで博士論文を書き上げました。研究者として駆け出しの頃はまだ子供が小さくて、家族や保育ママさん、延長保育、ファミリーサポートなど多くの方や制度に支えられました。大学教員になってからは4年間の単身赴任も経験しました。自然溢れる赴任先は私の第2の故郷です。とにかく研究が楽しくて、あの4年間があったからこそ今の私があります。

フィンランド人の女性教員が私の大学院の指導教官でした。その先生は日本の大学教員でしたが旦那さんと子供はフィンランド在住でした。その様子を当時の私は大変だなあ、と他人事として見ていましたが、10年後には自分も同じことをしていました。離れていながらも仲良い家庭を築いている先生の姿を見たからこそ、自分も単身赴任ができたのかもしれない。また博士課程の卒業式の日、子供を連れている女性卒業生を何人か見かけたのを忘れられません。「好き」が全ての原動力だと思います。

＜仕事と家庭のバランス＞

＜進路選択に対してのメッセージ＞

＜プロフィール＞

都立高校 → 私立大学工学部 → 国立大学大学院博士前期・後期課程＜学生結婚・出産＞修了 博士(工学)、大学院在学中に日本学術振興会特別研究員 → 私立大学博士研究員 → 国立大学教員→現職



人生は一度きり、後悔のない人生を

小川 由起子

長崎国際大学大学院薬学研究科教授(感染制御学研究室)

<仕事の内容とやりがい>

大学院を卒業後、母校の東北薬科大付属癌研究所へ就職し、世界的な糖鎖病理学者である箱守仙一郎博士の指導を受け、仕事としての研究を学びました。2006年に准教授として現職場へ着任し、がん細胞の悪性度への糖鎖の関与と、レクチンタンパク質を用いた副作用の少ない新薬開発を研究しています。大学人として、薬剤師を育てる社会貢献のできることを喜びに感じると共に、女性教授として先端研究へ参加する姿を示し、若手研究者に希望を与え、支援することが日々のやりがいと原動力です。

<進路決定のきっかけ>

高2までの夢はアナウンサーになることでした。しかし祖母が癌になったことを経験し、命の重さを意識するようになりました。抗がん剤の副作用に苦しむ彼女を見て、患者の苦しみを低減できる良薬を開発したいと思い、薬学部へ進みました。大卒後、薬剤師となることを考えていましたが、卒業の近づいた頃に聴いた特別講義で、基礎研究こそが将来のがん治療に役立つと明確に話された上記の学者の言葉に励まされ、医療を発展させる基礎研究へ進もうと決めて、大学院への進学を選びました。

大学院時代の同級生と結婚し、大学生の娘がいます。彼女の人生だから本人の興味ある道へ進めばいいと思い育てつつも、なぜか同じ薬学を選び将来は研究者になりたいと言っています。彼女が幼いときの子育て、家事と仕事の両立、現在の単身赴任はそれぞれ大変でしたが、夫の理解と分担、義母の多大な協力で、妻、母、研究者のバランスを保てました。現在は自立する女性の姿を肯定し、多感な時を比較的素直に育ててくれた娘に母として感謝をしています。

現代は、あらゆる事に選択肢の増えた一方、好きなものを見つけにくい時代でもあると思います。それを早く見極め、仕事に結びつけられた人は、豊かな人生を迎えられる可能性が高まると思います。私は、進学・家族・仕事の選択に、思わぬ人との出会いがあり、判断を要する時の心の支えとなり、悔いの少ない決定に役立ったと感じています。惑わされない強い信念を持つことと、人から手を差し伸べようと思われる柔軟な人柄を目指すことのバランスは、幸せな進路選択につながると思います。

<仕事と家庭のバランス>

<進路選択に対してのメッセージ>

<プロフィール>



県立福島女子高校 → 東北薬科大学大学院薬学研究科博士課程修了[博士(薬学)] → 同大学付属癌研究所助手<結婚・第一子出産>、講師 → 長崎国際大学薬学部微生物学研究室准教授 → 現職

人生万事塞翁が馬、転んでも只では起きない

玉井 幸恵

安田女子大学薬学部准教授

<仕事の内容とやりがい>

マスター修了後、私立医科大学生化学教室へ就職しました。糖タンパク質糖鎖生合成研究に従事し、ラット肝での研究をまとめました。最初の論文が、J.Biol.Chem.に載った時には、とても嬉しく、糖鎖研究に対する意欲が出て学位を取得しました。教授が交代し、IT・遺伝子研究全盛時代となり、仕方なく教育研究「ITの医学教育への導入」も始めました。3人目の教授時代に、プロテオーム研究を開始、薬学部へ転職してからは、今までの経験を全て役立てる事ができて満足しています。

<進路決定のきっかけ>

親から資格をとれる学部をとられ、薬学部に進学を決めました。この時点では、薬剤師になって就職・結婚すると思っていました。大学で、生化学に出会い、初めて学問に興味を抱きました。仮説を立てて、実験系を組んで、結果を解析し、再び仮説をとった研究の流れがとても面白くて、大学院への進学を決意しました。将来は、広島を出て就職したかったというのがあります。当時、製薬会社の研究所は女性を募集しておらず、教授から結婚後も働くには大学が良いのではと勧められました。

夫は大学の同級生で、大学院修了後一緒に関東に就職しました。1年後に結婚、すぐに長男を授かりました。親元を離れて、二人での子育ては振り返ってみれば大変だったかと思いますが、その当時は夢だったので、何とかなんと乗り切ってきました。仕事と家庭とほとんど同じウェイトで、子育て期間を過ごしました。子育てが一段落後、薬学部へ移る事になり、今は仕事人間になってやっています。特に計画して過ごしていた訳ではありませんが、結果的には子育ての経験も仕事に役立っています。

進路選択に対して、最初は親や先生の影響が大きいと思います。しかし、それから何がやりたいのかを決めて選択していくのは、自分自身です。まずは、夢中になれる好きな事を見つけたいと思います。人生は、なかなか思うようにはなりません。挫折もあるでしょう。それでも良いので、思った道を進んで下さい。私の好きなネルソン・マンデラの言葉を贈ります。生きるうえで最も偉大な栄光は、決して転ばないことにあるのではない。転ぶたびに起き上がり続けることにある。

<仕事と家庭のバランス>

<進路選択に対してのメッセージ>

<プロフィール>



名古屋で産まれる→中学1年生夏に広島県へ→広島大学附属高校→広島大学薬学部→広島大学大学院薬学研究科→聖マリアンナ医科大学実習助手・助手・助教→安田女子大学薬学部講師→現職

5年後(10年後)の私に会いに行こう!

中山 榮子

昭和女子大学大学院生活機構研究科 生活科学部環境デザイン学科 教授

<仕事の内容とやりがい>

大学院修了後昭和女子大学に就職し、そのまま教授まで昇格しました。大学での専門と異なる職場でしたので、過去の業績がゼロになった感覚で一からのスタートは厳しかったです。教育中心の大学で、研究に対する考え方も京大時代と異なりカルチャーショックでした。その中で、学生さんと共に学んでいくことは何といっても喜びであり、大学教員の醍醐味です。大学の運営などに割かれる時間が年々増えていますが、遅々ともよいので自分の研究を進めていきたいと思っている今日この頃です。

<進路決定のきっかけ>

小さなころから”ボタンがあれば押しみたい、ねじがあれば回してみたい“でした。実験大好きで卒論なるものにあこがれ、大学は実験がいっぱいできる場所！を選びました。特に職業と結び付けていたわけではありません。(ここだけの話ですが高校時代の教科で好きだったのは国語と音楽です。)ただ、「わからないことに対して、自分で計画して実験してその結果をもとに発言できる世界」を夢のように感じていました。

夫とはお見合いで、学部生の終わりのころに結婚しました。修士課程の途中で長女を出産し、スチューデントマザーになりました。就職したのち長男を出産しました。今思うと、修論作成中は長女が赤ちゃんで、博論作成中は長男が小さく大変でしたが、若さと勢いで走っていたように思い出します。それよりも、別居婚のほうが大変でしたね。双方の実家も遠方だったので、友人やご近所の方々に支えられて、この期間を乗り切りました。(

重要なことは「最後は自分で決める」ことだと思っています。誰かに決められることや、本来あるべき選択肢を奪われることは「イヤ」ですよね。そのためにも、じっくりと多くの人の意見を聞き、どのように振舞っているのかを見、自分は何をしたいのかをしっかりと考えることから始めましょう。そしてその時々での決断を後悔しないでいただきたい。良い選択肢を思いついたらそれだけ成長したと考えましょう。人生は長いのですから。

<仕事と家庭のバランス>

<進路選択に対してのメッセージ>

<プロフィール>



京都大学農学部林産工学科(結婚)→同大学院(第1子出産)→昭和女子大学に就職(第2子出産)→現在に至る

この間 理化学研究所共同研究員・客員研究員

The Natural Resources Institute, Finland 客員研究員 など

挑戦するのに遅すぎることはありません！

懸橋 理枝

(地独)大阪産業技術研究所森之宮センター 有機材料研究部 研究主任

＜仕事の内容とやりがい＞

現在の職場は公設試験研究機関で、研究に関しては比較的自由にテーマを設定できますが(とは言え、実用化が目標にはなりませんので、本当の基礎研究は難しい)、本来業務は企業からの技術相談や依頼測定、受託研究などです。学生も、装置を管理してくれるスタッフもいませんので、実験はすべて自分でやります。大学との共同研究で学生を指導することもあります。むしろ分野の異なる企業の研究者とディスカッションしながら研究を進める機会が多く、非常に勉強になります。

＜進路決定のきっかけ＞

高校時代の化学の先生にあこがれて、理学部化学科に進学しました。学部で卒業するつもりでしたが、卒業研究がおもしろくなり、もう少し続けたくて修士課程に進みました。研究室の教授が定年となるタイミングで博士課程には進学できず、いったん企業に就職しましたが、配属された研究所で研究をするうち、やはりもっと学びたいと思い、大学の博士課程(修士課程の頃とは別の研究室)に戻りました。企業での研究も楽しかったですが、自分でテーマを選べる場所で研究したいと思いました。

夫も研究者で、昨年までは二人とも比較的近い場所にある研究機関で働いていました。しかし、地方公設試は近年、研究所の統合などで組織が不安定なこともあり、夫は大学教員へと転職し、単身赴任となりました。以前に比べると大変にはなりましたが、毎週帰ってきますので、同居の頃とそれほど一緒にいる時間は変わらないと思います。また、私たちには子供がいませんので、仕事と家庭のバランスは自分の意識次第です。

自分の好きなことが早くにわかると進路を選びやすいと思いますが、私はそれに気づいたのがかなり遅かったので、結果的にあちこち回り道をしました。でも、企業や大学では多くの人に出会えましたし、そこでの経験は無駄ではなかったと思っています。いろいろ経験する中から、本当にやりたいことを見つけられればよいのではないのでしょうか。最近では、社会人になってからも教育を受けられる機会が増えていますし、自分の好きなことに挑戦するのに、遅すぎることはないと思います。

＜仕事と家庭のバランス＞

＜進路選択に対してのメッセージ＞

＜プロフィール＞



福岡県立東筑高等学校 → 九州大学理学部化学科、同大学大学院理学研究科化学専攻修士課程修了 → 日本鉱業株式会社(現JXTGホールディングス) → 九州大学大学院理学研究科化学専攻博士課程単位取得退学 → 九州大学理学部化学科助手(この間に博士(理学)取得) → 大阪市立工業研究所(現(地独)大阪産業技術研究所森之宮センター)入所(H18-19スウェーデン ユブサラ大学客員研究員) → 現在に至る

いつか未来を拓くあなたへ

本間 美和子

福島県立医科大学 医学部 生体物質研究部門 准教授

<仕事の内容とやりがい>

生命活動を支える分子の働きを科学的に検証する「機能生化学」分野を専門としております。細胞増殖に必須な“タンパク質リン酸化酵素”のシグナル伝達を中心に、細胞の中心にある核が果たす遺伝子発現や翻訳等の機能へ関与する仕組みを研究しています。正常なシグナル構成要素が一つでも破綻すれば疾患が導かれる要因となるため、一つ一つのシグナル分子機能を他と関連づけて理解することが重要です。ゲノム、RNA、タンパク質等の生体分子を高感度解析する手法、創薬のプラットフォーム、人工知能(AI)等の開発が日進月歩の勢いで進む科学の時代に、最先端を学びつつ他分野の先達研究者達と連携し研究ができることを大変やりがいのある仕事と思い取組んでおります。

学位取得前後の2年間は学振研究員として給与を頂き、生化学は皆そうですが“実験室と結婚”と言われるほど研究室滞在時間が長い実験三昧の日々でした。正規の教育・研究職を東京医科歯科大で得てから大学院時代の元先輩と結婚し、妊娠中に短期米国留学時に“子供を預けて働くことをguiltyと思わないで”と女性研究者に言われたことが印象的でそれ以来ずっと心の支えとなっています。都内保育園入所は難しく、実家の2階に引っ越して両親と夫の全面的な支援を確保し、第2子出産後はベビーシッターの助けも得て仕事を続けることができましたが、入院するまで産前の休みは取りませんでした。限られた時間の中で失敗のない実験をする工夫、時に休まざるをえない子育て中は特に、周囲への感謝と協調性も大事と思います。子の成長に伴って、友人関係、勉強、進路、そして老親の健康問題、自分のキャリア、と悩む種は次々と出てきますが、しっかり家族と話し合うことが、それらを乗り越える必要条件ではないでしょうか。

<進路決定のきっかけ>

小学生までは真っ黒になって様々なスポーツに興じる活発な子供でしたが、本が好きで国文学への志も温めており、文学部へ進学して人間のこころやいのちをテーマとする作家になりたいと思っていました。ところが都内の私立女子中学・高校で理科の素晴らしい先生の指導により生物部に入部、次第に実験による科学的な検証の面白さに惹かれて行きました。大学は理学部生物学科に入学、すぐに仲間と基礎科学分野の教科書を原書で学ぶ読書会に入り、大学祭でも発表するなど科学の入り口も楽しみました。卒業研究で指導を受けた生化学分野の教授が医学部へ異動されたことに伴い医学系大学院へ進学し、癌遺伝子シグナル伝達の研究で学位を取得しました。

親など周囲の身近な人間の希望あるいは偏差値指導のような、外から期待される自分像ではなく、自分自身のこころと向き合い内発的な真の希望を知ることが肝要です。そのためには本を読み学ぶことはもちろん、早くからいろいろなことに挑戦し、小中高大それぞれの時期に適するイベントに参加するなど、大きなアンテナを張って自らが情報を集める努力は必要ではないでしょうか。

<仕事と家庭のバランス>

<進路選択に対してのメッセージ>



東京大学大学院医学系研究科修士過程、博士課程修了(医学博士)、日本学術振興会特別研究員、東京医科歯科大学医学部文部教官助手、米国ワシントン大学Visiting Scientist、福島県立医科大学医学部助手、講師、等を経て2009年より准教授、日本分子生物学会(第18-19期)執行部、米国分子薬理学会学術誌Board Associate Member、iPS Trendサイト開設と署名記事寄稿へ関与。

夢をもって、新しい道を切り拓こう！

野呂 知加子

日本大学生産工学部応用分子化学科教授(医学部細胞再生移植医学兼任)

<仕事の内容とやりがい>

大学院卒業後、任期制研究職を歴任。比較的自律的に研究できる環境に恵まれ、それぞれの職が楽しかったですが、任期終わり頃の次の職探しはなかなか大変でした。最終的に理化学研究所の定年制研究職に。院生を預かって研究指導するうちに、大学教育に興味を持ち、今は私立大学教員として、研究と教育に携わり、「一般の人や子供たちにわかりやすく生物学の楽しさを教えること」や「次世代女性研究者が生きやすくなるような環境作り」についても活動。忙しいが充実した日々を送っています。

<進路決定のきっかけ>

中高一貫女子高で出会った若い女性の生物の先生の影響で、いのちというものに興味を持ち、理学部生物学科を選びました。中高の先生の影響はとても大きいです。次の転機は大学院進学で、ここですばらしい研究(細胞接着分子カドヘリン)に出会って、研究者・学者として生きようと思いました。私は、人の言うとおりに毎日ルーティンワークをするよりは、自分の意志で自分の行動を決め、他人と違う新しいことをしたい性格なので、研究に向いているかもしれないと思いました。

夫は大学の同級生で、一緒に大学院受験して京都に行き、そこで学生結婚しました。博士課程の途中で長女が、最初の任期制研究員時代に長男が産まれました。私は中学からオーケストラでバイオリンを弾いており、今も地元の市民オーケストラでビオラを弾いています。夫も音楽が趣味でピアノやチェロを弾きますので、いつも音楽が生活の中にあります。子育て中は本当に毎日大変でしたが、そのピークはそれほど長い間ではありません。仕事と家庭のバランスはライフサイクルでいろいろ変化します。

やはり人間は好きなことをやりながら生活できるのが一番です。小さい時から好きなことが決まっていた娘は、執念で獣医学部に入り、今は博士研究員として働いています。一方息子の方は、好きなこと探しに時間がかかっているようです。人はそれぞれ、これだ！という進路や職業および人に出会うタイミングが違うと思いますので、いつもアンテナを張って、いろんなことに挑戦してみてください。また、遊びたい！という気持ちや趣味も、働くための原動力になるように思います。
Never Give Up!

<仕事と家庭のバランス>

<進路選択に対してのメッセージ>

<プロフィール>



フェリス女学院中学・高校 → 千葉大理学部生物学科 → 京都大大学院理学研究科生物物理学専攻博士課程<結婚・第一子出産>修了(理学博士) → 国立精神・神経センター流動研究員<第二子出産> → JST・ERATO古沢発生遺伝子プロジェクト研究員・グループリーダー → 英国ケンブリッジ大学シニアリサーチアソシエート → JSTさがけ研究21「細胞と情報」領域研究員 → 理化学研究所脳総研・バイオリソースセンター → 現職

希望に満ちた明るい未来拓くのはあなた！

佐々木 政子

東海大学 名誉教授、日本化学会 フェロー（東京大学工学博士）

<仕事とやりがい>

誰もやらない、誰もできない研究（仕事）をしてその成果を社会発展に役立てること。研究テーマは「生命と環境にかかわる光科学」。4年の卒研から博士号取得まで、光を利用する製版材料の反応機構解明に取り組み、位相カラーホログラム作成にも成功した。成果は多数の企業に提供され、高度成長期の人々の生活向上に役立った。

東海大学医学部との共同研究では、難治性皮膚病の光化学療法や薬剤性光線過敏症を探究。オゾン層破壊で増加する太陽UVBの計測器を開発し、日本での太陽UVB観測を可能とした。

<進路のきっかけ>

絵を描くことが大好きで、絵を活かす職業に尽きたいと思っていました。しかし、当時、絵を描くことを職業とするのは無理と周囲から反対されました。いつも明るく、友人も多い、学ぶことの多い兄が化学研究者・技術者だったので、化学を専攻しようと決めました。卒業研究では、兄が指導を受けた東京大学生産研究所の菊池研究室に入れて頂きました。ここでは院生との議論が絶えない日々明け暮れ、光に魅了され、光化学の道に進みました。

東海大学でも光探求が続いています。

人生80年の時代到来です。充実した人生を送るための生涯設計ーライフデザインが必要です。次の事項を心がけましょう。

- 1) 心身の健康を維持すること。そのために、体力づくり、食事、睡眠と休息に配慮する。
- 2) 自分の時間を大切に。自分を信じ、自分を愛し、自己探求の意識を持続させ、目的を持って生きること。
- 3) 話し合え、相互理解できる仲間をつくる。
- 4) 趣味を持つこと。
- 5) 大学生、大学院生のときに人生の伴侶となる候補を見つける努力をすること。

未知への挑戦です。中学・高校・大学生時代、男女差別はありません。やりたいこと、やりがいのあることを見つけましょう。家族以外の人たちとの交流、先生や学友たちとの交流やクラブ活動等を通して、色々なことに出会うとき、その意味も考えてみましょう。

好きなことも嫌いなことも、先入観を持たずに、見る、聞く、そして、これと思えば立ったらチャレンジすることです。

チャンスの神は一度しか来ないので、チャンスを活かす努力をしましょう。

<生涯設計ーライフデザイン>

<進路のきめかた>



東京理科大学理学部化学科卒業、4年時に東京大学生産技術研究所に卒研生として入所、上級公務員試験に合格し技官となり、助手を経て、東海大学へ転出。東海大学総合科学技術研究所等の助教授・教授を経て、現在、東海大学名誉教授。その間、日本光生物学協会会長、日本女性科学者の会会長、日本化学会理事・男女共同参画推進委員会委員長など歴任。現在JSTさきがけ「光の利用と物質材料・生命機能」領域アドバイザー、太陽紫外線防御研究委員会参与、松前国際友好財団評議員など。